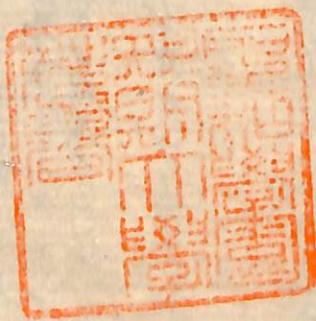


911.3

八
秋

併林良校



俳林良杖集

秋之部

雙雀菴水壺編集

秋

〔舊〕少陰ハ西方西六運モニ陰氣遷モ物を萬物時モから秋モ
生於八難ホイ拘撃欲ノミ成熟也

〔圖〕日酉陸を行。赤氣を起ム。○叶木の色モアリ。一派高き之万葉秋ノ氣アリ。零落ノ一葉を失フテ
サクナモ。其色を以テ秋ノ氣也。○萬葉セイ。是小初設宣。白藏。昊天。金
商。明氣。爽氣。少暉。蓐收。

七月

未則。辛秋。涸月。七夕。子父。壬午。○萬葉文也。月

○文也。壬午。庚寅。庚辰。庚午。庚申。庚戌。庚亥。庚子。庚午。庚申。庚戌。庚亥。

七月と季のつゝ星のそりの年

葦鞋

七月や五は三一寺町住居
七月や株ひづきをもく年を
七月の丙や寅ちからくに

廿六
正月
己未

文月直江集

文内や当より行幸娘の子 古庵角
路三月や春宿の事より新あす 、 楊家
文月や秋の事。文はひ 天峰山
文内や季の種ある叶の葉 上サハ
文内や季の種ある叶の葉 上サハ

秋

文有や藝の本心を失ひては
身の内身の内
甘葉

立秋

秋の歌。秋の物語

今朝の秋

秋のや度の間の池の水を採
きりゆの浪は秋の法うす、文母
二三才清かくもくにけり秋古葉九
約より松よもぎの秋、梅室
岩すらじて木と葉やまの秋、宋九
秋のれ叶のうめやあきの根
まことて松室一けさの秋、
甘葉

初秋

萬叶の名仲多々希あり 独 スリ 楠石
達清ノ耳はあまくアケミツ候 落水
木多高松は高きにシテ秋 エニ 古堂
初秋のうち海潮をめ繩を糺 古嵐宣
もう秋の候葉を吹きく比枝の風 奥二
はう秋や落葉の灯は木をうき才 トモ 山大
唐木木をうき初秋は一叶うり野 ヒコ 楠桂
衣ふや秋葉あらかじめ落り毛 エニ 大儀

秋の初風

秋の初風は秋の始まるうれ

上サ 柏葉

秋風

季節の風は秋の風やうきの風

上サ 素月

秋の風は秋の風やうきの風

上サ 素月

秋の風は秋の風やうきの風

上サ 素月

秋の葉を戴

夢をうかべて立秋の日柏葉を戴る葉を求めて

秋の葉を戴
（くわを）
（くわを）

秋の葉を戴

（くわを）
（くわを）

秋の葉を戴
（くわを）
（くわを）

秋の葉を戴
（くわを）
（くわを）

一葉

（いっは）
（いっは）

秋の葉を戴
（くわを）

秋風

一葉

（いっは）
（いっは）

秋の葉を戴
（くわを）

秋風

此物中以生者一品相一茶一卷

卷之三

柳散

見て居れど思ひたれど空氣

卷之三

攝待

筆を落す人の事ぢや
向かひへてゐる様子

あくまうり

9

擇得也。少子之年也。少子之年也。

廣雅

拂拭や名あをとハ細ニ恨 得矣
拂拭やタクナ思ひる人ナリモ 北共
アツナシナキモ皆モ拂拭ナレ、花潤
拂拭や拂拭豆子の門ナラヒ、西家
アツシヤ本子御子モ豆子ナヒ トサ ト外
拂拭や豆子豆子ナラヒナキ 卫チコ
拂拭や豆子豆子ナラヒナキ 下毛 貞秀
拂拭や豆子豆子ナラヒナキナシ

合志
山

門茶

唐文

蓑帽の向きへ聞く門茶歌

古事記

傳は歌きよし星を門茶歌

狂風

北野御手水

七日あり

七夕

ひまわり。星会。星うち。星のま向。星の真。後女
牛女。何真。女はあむか。をだあむか。ニワ星。いぬか。

七夕の夜川を下る

狂歌子

セタや夕歌をす人狂歌

唐民

セタや夕歌をす人狂歌

狂風

狂五

星今宵

狂文

セタや夕歌をす人狂歌

狂之

星迎

狂文

セタや夕歌をす人狂歌

狂之

星祭

狂文

セタや夕歌をす人狂歌

狂風

星合

星合や月合はまつて見る川の波

由緒

二ッ星

達ひらひらめぐるをくへよ 二ッ星

茶枝子

せりあつうそくらうそくら星

下毛重慶

のとまわせとあらわや 二ッ星一、 茶欣

せりあつうそくらうそくら星

下毛重慶

まわすのねらむほのほ星の系

下毛重慶

せりあつうそくらうそくら星のあき涼

下毛蕉星

星の別

せりあつうそくらうそくら星の別

下毛蕉星

星の系 星の別

彦星

草木萬葉をとせよ と星のひづれ

下毛 岸晴

しもれよや宵すよ更トサのうへ

下毛 楠英子

夷里年年もとみよと年をゆ

下毛 古松竹

かみ下トやとうら星あき相あら

下毛 古桂

大字の時達星のちだりうが

下毛 松風

せうしぬ一夜を星の夜うる奈

下毛 喜秋欣

ね風や星のちだりはねよほ

下毛 喜秋欣

内々きこつを夜うる奈

下毛 喜秋欣

船う運みあらうよしき星の夜

下毛 喜秋欣

かうりきの橋やまもと 沢山也

生也

二星の屋形

秋去衣

増七夕の具あり 開去衣曳根履應温よもよ是あら
又只秋の衣をも云々万セタカシナリテ後は布の秋衣
夜たきとうさん。旅を一月秋去衣をけまく
ひくふらを武原りゆに

名ち夜よしき秋去衣うる

宣物

人や旅船さくく衣足す

樹石

ナキよしや秋去衣さくく人

拙誠

乞巧真

乞巧の事。二度の立夏是星あつての事ありモタヌの
事ハ多くあつてさあくの事なりまたも様庭を度

願の糸

空の御室のほくや乞巧真 千赤岳

峰松

庭の立琴

立琴や絃ひへあくよみまほれ

ムサ

乞巧針

乞巧の事。織人それの糸よりのあくよみ

有大

貸小袖

さうねや竿のうち我ナシ小袖

峰袖

ああぬうちまとう持てう演や袖トモ一龜

硯洗

すくすくすけ硯洗トモ洗也

七箇池

墨をすくふらのたまいよあまい筆を拂ひの事
了墨は紙をうつてもくらう

梶の葉

梶の葉をうむも庵八重向うハツ 郡支

梶の葉ようかぬ墨の匂いハツ 八重
梶の葉ハツ書寫する宋の角

芊の葉の露

あきくはれのあうぞーよヒタの歌をあくまよいもの
葉の露ハツを取る處トコあうの利がよくうづく

芊の葉ハツの風ハツすくいよのあハツ文志

芊の葉代森ハツやちよ風ハツのあ

有人

芊ハツすくいよの風ハツを残す芊ハツの夢

松嶺

芊ハツの葉は遠ハツむつせの硯ハツう季

瓶舟子

夜ハツの風ハツの風ハツすくいよのあハツ

井右

深ハツの花ハツのきひく金ハツを芊ハツの露

喜松

年渡り

一年よて度ハツの川ハツをうごく年ハツ

高比間ハツの高ハツを年ハツの高ハツと

雨ハツの高ハツの高ハツを年ハツの高ハツと

山古

洒^{セイ}涙^{スル}雨^ウ 七日の雨あり六月の雨も
洗車雨と云事

毛至社歌ひよそりん洒涙雨

苦雨

洒涙雨う事ひよそりん洒涙雨

苦雨

本御門跡ノ籠花七日叶をもむく籠花の御物也

古 崇宣

秋風うりし酒をのひく立翁立翁也

古 崇宣

飛鳥井家七夕鞠

七夕の蘿や舞臺秋布ま

葛岳

逆ノ峯入

東山を七日當て八日あり 聖護院三室院の西門主
一世上にほどよき此の奥金は峯山は多中一夕ふ日暮立翁
山伏あゆる所を尋ねを以て峰と云
秋山より逆の峯といふ

秋十

是より日和教會や逆の峰

有心

病氣病氣をすすめに連ひ

怪

六道參

九月十日有日あり京師の信陽寺と波羅寺の東山逆の珍皇
寺山房で聖衆を迎ひて其の縛を解く事ありて是より

網亭網亭を施す山逆の山より

空納

迎鐘

うつへ寄くをみたすはれの鐘

古 崇宣

楨買

是より立翁より來り

松里松里を施す山逆の山より風

移勢子

清水寺千日詣 十日

中元日

十五日より中元日より云

孟蘭盆

圓滿の日。毎年・施餓鬼日(夏の母)の母餓鬼の日。七月十五日。百味丸
菓を供へ十方の佛より善をせしめし。母終は食を漏らす。月
月蓮仙よりうきく供え子の奉仕を行ふものがある。うらを
をあさる。よし大善いのうきく
是うらをあさる。是うらをあさる。

駄買

孟蘭盆和宵坐山廬町

恩成

此難

うちを長老はおおむね者戸の

雪的

孟蘭盆や行を向かひよ。將

松曉

六直參

物うけ内をあまく參出る

常曉

亭相や以歩も母子を立す

世貞

此難

うちを長老はおおむね者戸の

雪的

盆の月

斜室へ歩き見る月の体の月の月

サカニ

木鷺

おもいもひもほりかの月

トモ

山古

施餓鬼

國うなじのとくははし施餓鬼舟

ムツ

社山

玉祭

聖灵祀・祀經・三毛・毛・枝豆・枝豆・根葉・毛葉

ツキヤス

木

あき人のまつよきまつよくへ原よひ度のり。報恩經よみえう
中よも七日はうらをよひよくへ一へまづりはうを經よも十五日よ
地友羅人の善惡をかあざる日ありとてを土生日度經よも
詠の修持をどうするかしき。法大、聖底よまうと餓鬼のうそと絶
まくゆき。事よみえう。報恩十四日御開。おもい

十六日午時よ陰る。す。信よ。圓

月を西よ手あつて立あまはり。峰風

下毛

一龜

す様の事も覚えずあり 素文

お柳やおきよみの風景

東居

お柳はむすめのしあや月の空

渭水

草市 町市や落の子の写をどま

高芸

落葉や秋のよきのちうもいろ

立花

桐経や落の葉くは枝とど

トサト外

桐経や落の葉くは枝とど

立花洞

落葉や落の葉くは枝とど

立花洞

落葉や落の葉くは枝とど

立花洞

迎火

延火や煙りはあかく叶の先

トサト外

日ひゆる年をもてし山家

高芸

むらしゆもう年一泊りも今せし

峰也

鼠尾草

藻

み草をもと云

鼠尾草の香ひる野草一月二日

万枝子

もと鼠尾草の匂ひのやき風

高芸

みそ薪や便を笑ひそむ

立花

鼠尾草やもくらす一月二日

万枝子

もと鼠尾草の匂ひのやき風

立花

仙米

凡馬

西凡

麻壳箸

物も不用せしをのした

秀光

是もおもてすに持てば其壳箸

トサ

花肉

の付へ神」をきのつ箸

橋左

切のうをハ經」

茅うち込

文里

主のそとてあうのうをきのた

珠衣

墓參

增

七月初先祖の墓よりおもひからんの心と
おもひをもきはめ修善すより

圖より

家をもむくあらへ墓參り主喪支

墓のまゝにあらへ町の墓參り、市様

駄まほ様ども河の墓參り、聚嵐

湯よか合の聲やもの争ひ方舟

をも居るのまよ通じて墓參り、五波
おもむくあらへあらうとのま

唯

風

乞うまよ祠アマモをもて墓アマツばかり

神カミめむき宿アマツめむきの墓アマツなり

奉事アマツ事アマツを申すを墓アマツあり

むづかさを捨アマツ妻アマツをもが事アマツ

生身玉アマツ蓮の飯アマツト一轉アマツは妻アマツ父安アマツおもろ人アマツハ生身玉アマツももひし

蓮の飯アマツあきを繕アマツて是アマツあは佐アマツおもそ一轉アマツをもとて狀威アマツ

コムリの空アマツしもつまは生身玉アマツ

旅アマツのうへおもひハアマツ一坐身玉アマツ

蓮の飯アマツ荷アマツ葉アマツをもとて蒸アマツる擣飯アマツをほくと觀音糸アマツを用アマツ

蓮の飯アマツあきを繕アマツて是アマツあは佐アマツおもそ一轉アマツをもとて狀威アマツ

生身玉アマツ蓮の飯アマツ

乞うまよ祠アマモをもて墓アマツばかり

神カミめむき宿アマツめむきの墓アマツなり

奉事アマツ事アマツを申すを墓アマツあり

むづかさを捨アマツ妻アマツをもが事アマツ

生身玉アマツ蓮の飯アマツト一轉アマツは妻アマツ父安アマツおもろ人アマツハ生身玉アマツももひし

蓮の飯アマツあきを繕アマツて是アマツあは佐アマツおもそ一轉アマツをもとて狀威アマツ

蓮の飯アマツ荷アマツ葉アマツをもとて蒸アマツる擣飯アマツをほくと觀音糸アマツを用アマツ

蓮の飯アマツあきを繕アマツて是アマツあは佐アマツおもそ一轉アマツをもとて狀威アマツ

文里

作友

萬彼

料理や料理の文化をもつて

来客

燈、炉。

煙草や灯をうるまに火のきを袖
せうじをとひ語りあひとうらば
見る／むちゆる／みゆ／鈎とく説

俄友

煙草や灯をうるまに火のきを袖

鬼村

煙草や灯をうるまに火のきを袖
せうじをとひ語りあひとうらば
見る／むちゆる／みゆ／鈎とく説

テハ室山

切籠

河原

遠くの眼まく寺の切籠あれ
雨よ戸をとひて寐かせ切籠べ
生むつてあまうておきがりあれ

ト外

踊

鳴あんてありの間まき切籠うか
切籠をくわすむのを表
鉤とくをねうるわうおくれ
小町をとく。おとをとく。大せをとく。おおのとく。お
あさきよけ。うけをとく。床り町へとく。ゆきをうす

芭吹

辛味

辛味

足音

わ角と席とひの起坐をとくべ

蕉室

多く笑へば、拍子あひ多きをとく
芭吹

芭吹

三井寺女詣

十五日は代ては女人まいひひまわ

芭吹

芭吹

三井寺女語 三井寺へ坐て日の暁や女子達

一章

晩鐘の金石や女の三井寺

素助

志をもやもや波立つらの三井寺

萬政

三井寺を立ちへば持ふ女とも

優しく

トイリ
軒窓入
絹漫披よ田畠ハ諸ふよはとへとま家よそ秘庵せす翁翁
トヨリ小きるは故居宮よのれよ根筋よそもりあり近はと
勢あ山田の傳うりが子事ノ山田のつゝへと云家残はれおもく蓄
ふもち貪欲の若うう徒うが量をさん事のためよ
久々一もよろこび七有士官あら今へ難主あ

門と入りうしゆ向うゆり一時 7年 一龜

御宿入や人をだらう押せり

ほと入や出でやれどもゆきり散

嵯峨

經木流
十六日拂拂四天王寺の東便處あはる靠井のみゆく經木の
表ひ法名を名す。龍井の名をもてて是れを吊すと
石經木を那敷地と擬へて法名を名す。

比房のとある御宿を修まつたり

大文字

端より舟よそしくる經木くれ

水年

送
ハ
用十首。施火焚。門火。大文字の大。夜。唐火。舟形の大
字は字畫凡事のありふるよほせひ云。宝町高柳の草の日遠
室の親と金をもとめ、もとめの有て車通す當面よみよおみす
横川葉ニ草むとまよあくまく弘法大師のあきる雲あくまゆの後
景子ちの。一月六日幕を伏す。東大寺もよそしくるよほせ
ひよふをも。凡大文字一う。寺百五十九株北尺丈をうりを圍つ
をつもう。一堆を教四百八十寺を名前をきく松子後日の役うを
付用別よ太さをもとめ。法陽の壯觀あり。寺がからだう。豈妙法

の二字を矣。一或ハ舟足の舟形の大木也。而うひハ河とおら
を居於大方を矣。左傍かまくの山岳。英豪達人。きくい集。ア
了枯庵の様あるじよ様の枝破子公に素を焼く是を聖秀の
送り文もあて被文ともいふ。

おりややしほきの持は

古史 那

送り文やう。後ハ假の持なり

金仙友

大文字

山の鐘の事。すなはち大文字

古 崇雪

妙法の大

妙法の大を是。至一。キムクレ

若 説

妙法の主。宿主。大。名。義。主。

下サ 玄肉

妙法の大を宿主。大。名。義。主。

東居

妙法の火。火の持。大文字

東居

妙法の火。火の持。大文字

上サ 持 痘

キムクレ。せあや。火。門。火。火。

傳 く

ヤバタアドウ。八幡。六。肩頭。を。原。ト。國。ノ。所。イ

解夏草

折木の傳。家及の日練。を。原。草。ツ。片。櫻。裁。主。傳。を。

云。國。去。詳。叶。ト。モ。リ。シ。

翁友妙。石。森。火。迷。黑。モ。ゼ。ム。ル。

東居

夏書納

季の事。ちの事。本。火。を。見。事。

上毛 信水

花 火

試。よ。初。の。事。本。火。を。見。事。

上毛 信水

舟渡の空間よそく船大それ

心星

寝ゆきのきや木をよけるひそゝ

棲居

地藏祭

廿四日壬申六地藏あさ子童の灯炉を
まつりあり

穂屋

廿七日後御山林山原より種子なる種屋ありもとへ
勧使をまつるかの種屋といふが其のとある所よりは根室を
没するありて種屋より種屋をうくるあり新式船棹より云ふ者
ほくまハ根室の森のよりあり根室の祭ハ年中七十度何うもの
一あり

いづれへの移主とまわる種屋なり ハヨリ由

來度をき一島をまわる種屋 佐野 金 や君

御と村ハ神風をほり種屋也くら

優

相撲

りきうはい万重お撲公達よひあきら徳重の所は
のをほりらめく七月よ相撲のせうじほく天子の御簾を
さるふりあうが幕幕よお撲公とあくちあはくうむよ徳重よ
すしをめき体の西もり年號寛平七年よ重ま櫻を以て是因
事修業毛立よ相撲の秋よまくひく八月の御櫻をあくみくさび
あくく一毛立よくらもまたよひハ傳説をかぢをてよくさひ
とくすよひ秋よ
とくすよひ秋よ

お草、衣をまつるよ年一角力代

花旗

本草書を假手よまくよまくひ

健風

タ内や二百十日の人道里

ヒタチ

素内

塔ノ巣山や二百十日人道里

ヒタチ

宣山

着る江や二百十日人道里

ヒタチ

宣美

二百十日

露

白癌・うぶ癌・波の癌・袖の癌

二百四

事の如く、まことに、おもてはるゝ處に書

イツ
松室

霧

病の所に窮ひ

福の佑へ窮の色・鉛の如く。かう主人・専用

招の内に暮の色・鉢の草・むすび人・青雨

稻
妻

歎のあや山のそれよりいつの
遠のけや雲の音にふかと聞
夕霜や今すみ簾の残雪に
見か
種はすとくもすく満りありば
芹全

殘暑

いわば手や壁をもつて車の耳を仙友
漫遊の新地よあくは暮れの朝、向左
さすゆる雨は残暑の暮りをムツ不及

朝夕の秋は葉と残る木

象外

暮の実は秋の物に秋の葉

峰

秋の木は日暮すもて暮さぬ

上毛

白薙

初嵐

御まつり時秋さとめ初嵐

秋之

布さるまきとくは清りと神清し

承年

跡妻

秋嵐妻のやう葉のいと秋あす

下サ

妻あ

ほくきの静の秋えども神界、庵を

め

身よ入

内言ひなむる身よ入もくらべ

め空

身よ入らぬのあや、ほの香

素浪

方よもや樹の葉も秋の事

不自由

冷
ヒヤカ

身よ入や去の葉も秋の事

峰風

一亭

身よ入・いやつき・いやくと聲をあまでしづく床されと

峰

とす世のやがての秋歌ありとぞをひく床の歌の向と思ひ復りてお坐を集明歌集えども一昔かく薄りての歌りとふ得友歌へせりうち後歌ひをそよま彼歌更よみんを清音子より一言よおもてことのあまくちよくせりう全くす寄聲のとおのまうかよ後悔あり先機の集を聞せ一曲を遣必得シ一ゆふ

ゆふかのせ

身よ入の葉うすすの峰風

鳥た

身よ入の葉うすすの峰風

葉秋

山中はまの多後を画せし處らば ヒタチ達丙

山中はまの多後を画せし處さへ ムツ一宣

初涼シ

アラムナヒシ是處のひまうれしきはまの近づくがちにあら

扇一タモト御手もの

語也あり

書よ筆すはまのてまし麻比色 千吉 章晴

扇置

書扇あく・扇生もと

扇あく筆す日和也あく 崇

峰

扇あく筆持すあくめ雨二日 下サ 来乃

小

扇あくノ人ふ性すもあく尾

来乃

にのく、お限を遙か在る扇あく

泰山

扇あく日和あくお空叶の雨

泰山

志をくる扇あくて吸ひ入り

泰山

衣の袖すまつ一葉する素扇墨

文姫

あまくの袖するすり酒づられ

峰舟

團扇置

周木立ありありも高き

圓

幘の別

周木立ありありも高き

圓

木 横

周木立ありありも高き

圓

官内より京の新ら毛木横され

樹石村

雲雲

かうさあへ姫のゆまうやむ本 桜

系 桃 通

鞋と靴とゆゑみうる本 桜 姫

候とのゆゑみうる姫の木 桜うれ

蓬湖

草花

學うる草花はやくし叶のむ トモ 文 宏
まめくす学ハキウム叶のむ トサ 莺 水

柳をやともす向ひ志をぬき、

音 改

葉をやともす竹をや叶のむ

山 子

葉をやともす竹をやか難を嫌

金 田 政

翁よ叶をやともす井戸の元

吉 田 優

女郎花 古をまつて一の時をうでるよし室城天皇の御園小桜
輕風と云ふ、ほりハ情すうちむ人ありりとまよ女を愁
あらわすよめあくあめこめくらむいはくよまきのうけを眼る
すうりとみにまくのめ夜をねまよまくと月をあやめてるあ
お酒をすまへる春暮——うれきぬめの暮をちくをもあ——とあが
お風ゆきとよもよせむらむよせむらむよせむらむよせ
しくをもよもよせむらむよせむらむよせむらむよせむら
立町をうりとむく圍

まよめの老の名をはし女郎也

津 風

まよめの娘の娘の名をはし女郎也

春 將

授ひのよ戸口のせす——女郎也

棄 店

ねばたのよよくせす——女郎也

金 篠

茶花

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎
白翁あると傳ひて云又あらじも六女郎

男郎花

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

一竹

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

トサ 一亭

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

朝顔

芭翁有

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

芭翁有

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

芭翁有

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

芭翁有

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

芭翁有

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

芭翁有

芭翁有と傳ひて云又あらじも六女郎

芭翁有

名うべや葉よみくせんをかふ ムサシ 海鷗

ムサシ

葉の秋もとを喰う事す、葉茎

らきのむち日毎の草は衰えたり、梅園

萩

小萩・さきの萩・さきの遙・萩雪叶

雪枝子

ちの萩をかづつあう) 萩

お部

本(木)の向(むか)つにや萩のむ)

スリ

李(イ)候

家(いえ)の萩や萩のむ近(ちか)い空

スリ

萬(まん)里

峰(みね)をさうあお望(のぞ)めり(の)萩のむ

テハ

五(ご)重

鳴く(うき)月(つき)は(は)まや(や)かの(の)萩

萬代也

鳴く(うき)月(つき)は(は)まや(や)かの(の)萩

萬民

萩のニア夢(ゆめ)萩(はぎ)の葉(は)

清涼殿(せいりょうでん)

白(しら)菜(な)

萩殿

白(しら)菜(な)

葉(は)の(の)萩(はぎ)の(の)葉(は)

巨(きよ)舟(ふね)

葉(は)の(の)萩(はぎ)の(の)葉(は)

宋(宋)山(さんざん)

葉(は)の(の)萩(はぎ)の(の)葉(は)

寒(かん)山(さん)

葉(は)の(の)萩(はぎ)の(の)葉(は)

史(し)水(みず)

葉(は)の(の)萩(はぎ)の(の)葉(は)

史(し)水(みず)

葉上絶了手を差けハ葉葉子 玄宣
葉の上に古ノを御りハ場所ハ 湾城

藤袴

名をうやう云々名け

毛とまく、白いの手ア 藤袴

高山子

毛とまく、葉はありて多々藤

高麗

里人ハ毛とぬらす多々毛とま

高麗

毛と名を付すアーララ藤

高麗

うる日ひにテテテテテテテテテテテテ

下サ

生光

毛とアリテ葉子あつた藤

義正

芭蕉

根葉さすりて植處すすめ芭蕉ハ

ムサシ

不由

ねりうちをらうきゆ一ノ木せせせせせせ

文里

雨あひねハ根あひ木せせせせせせ

酒家

うそもよるの言葉芭蕉うそ、夢函

少古

うそもよるの言葉芭蕉うそ、夢函

少古

在鐵葉の破きつまきまき北危

テハ壁

都すれ衣影づみか。芭蕉うそ、野

移

破きつまきまき北危の木せせ

平子

布

やうせくわやうせくわの木芭蕉ハ

喜洋

再三モ芭蕉よりうの高トサ文耕
嫁哉よおおきよもや娘の妻づれ、方尔
小車の花 小さくすや奇にしうちき尼の庵
桔梗 ひきの初ふき

山風を夢うるべ一枯枝小
雨
枯枝をやしの何物かしハ芳艸
於ひうめ人ふ乞ひうきゆハ其の後
あらせぬ叶よしの枯枝ノれ下サ庭
落葉を却り絶行アシテ文種

狗子草

秋種を植ゑたいぬの尾をねぐ
裏のやせ出

馬の音乃少く之は大子町
種を挿入伸ばす事多し之は大子町
波路

府の種のトマト、やまと太子等

卷之三

卷之三

あやしくて、ふたたびもあらぬ秋の色

卷之三

隣の水井を引し森の旁 上毛 心星

漁港の町影はしきすら青い色 テハ 捜求

森すや山をすむす 十日亭、喜山

木立すりへ山すらあそび シテサ 庭先

矢にさす出るそよぎや秋の野、音玩

相撲草 セアシキ 人あそぶお盆引で縫廻ハシマリ 一見盡み城

歌ひよまほ煙ハシマリ ああ—— 皆名ハシナミ

付て秋事ハシマリ あらそひよまほ

朝夕の病ハシマリ あそびや角力ハシタツ

徐蓮

墨夢ハシマリ うつみソノ角力ハシタツ 外

蕃椒

細葉の風ハシマリ くせのまきひな、庭谷

あややの森ハシマリ をちのや角力ハシタツ 、

暮月

草すすに寄ハシマリ はなやとて庭ハシマリ に

葉葉子

秋風ハシマリ とよよよして庭ハシマリ に

の 葵

草すすみをつまうちや蕃椒ハシタツ 、

葉葉子

暮葉ハシマリ 日暮ハシマリ とみぬ唐辛子ハシヤウ

秋風ハシマリ とよよよして唐ハシマリ に

ト 外

秋風ハシマリ とよよよして唐ハシマリ に

種好

あくても何ハシマリ かきの唐ハシマリ に

篇

曼珠沙花

本名石蕊波浪名云曼珠沙花とえ梵語より
葉を生むが仙人ねやせのく深緑色をもつて其の
生長する年数の多からず年少のうちをもつて枯る

お仙のゆゑ波浪名へ向ひのものと
詔釋り云々

りし河もくあまく神よ曼珠沙花

お代女
風のうけのさくすは伊勢やうへゆうけ
霧村

經糸を圍ふ糸松や芳珠さけ 波浪
あきらしき庵のじろや芳珠沙花

雪山

義深くお入様やうへゆうけ

ト外

うづくゆきの庵や芳珠沙花

空風

仙翁花

品種系譜附註曰舊紅綠葉莖のうき云天葉旋度の
解説種を中草小又石竹の種より來
中草納子何う一名青秋種

お徳とめぬ葉の窓けを仙翁花

樹石

藥師草

青切多角圓葉之山院の朝子唐銅陰影と云ひの
をもとておきをつくるよもうちある

とてもうく秋のり冬の霜が向ひいきのよおきをもと
晴れ草を青切を急切敵吉とすう青切叶の名うとすまつ
叶一切の草名種をもとてはるの神効行うと是あひかくまつ
あす

茅切草

峻吉久人切物叶と筆を拂ひて

草吹

觀音草

六七月茎を抽す小淡葉を細き種を生む

大葉玄門草を拂ひたまふ

益母草

款あき。朝事の如ひうれ
ぬをもぎ。字革馬。莊子の事。多能。有才。生平の名。又善寔。其生平の功。婦人。

卷之三

母草 ぬちもき草 草の花子葉の葉を切
生葉を蒸すと茶葉を生むて味を切
ゆふすまへて精を益す故に益母の
名づけられし也

卷之三
萬世之傳
卷之四
接角子

翁草

本圖白頭翁山楂湯治久病一劑無殊色變之
向愈。毛氏去之。子不入矣。

拉第子名如其行也。予中和翁钟。乞。龜。祐。

久々見習へる事あつたる所へ

茗荷ノ花

後山翁の詩集

毛
山
長

癸
花

筆味あるつるを手筋を御へる。内蔵通草
付の旁を上手に手を運び或は板に絆りよせ等の筆

の事より、従て名を年號とす。是和産なり。庄内之菜屋
之をかよひて、七月、菜屋は角屋の名前をひらく。五年後、
中ノ一躍、吉久のうちゆきを、菜屋は、吉久と改めし。
名を承る。一之子は、櫻井と名。

也。君不妄生苟死。以成其名。後世
之傳。亦復何疑。

ほのくと黒を落す) 夏色 トサ主裁

萬葉集卷之三

鈍
豆

蓮美飛

萬葉集卷之四

大手の実地運営も小附合

萬葉集卷之二十一
日和
ムサシ
序

卷之三

下
卷

外
卷

卷之三

系
瓜

卷之三

卷之三

文部省圖書監修官

卷之三

卷之三

西

卷五

卷之三

卷之三

卷之三

未氏の事

卷之三

蜀漢

萬事如意
年中平安

種
好

早 槐
田 花

事務の事や以てよむものうち

芳
叶

室のや

易經卷之二 種德於厚 扶正而
亦地而久方者也。子思子

卷之二

新之助の書の事

思
誠

稻の花

麻うゆる板とせのう鶴の音

卷六

殘
數

鰐

閩中子園山房詩卷之二

通
四

秋ノ蝉

おのれのまゝよ生れ——秋りやく

呂
説

秋ノ蝶

うやむけの秋の少情の如

卷之二

秋，螢

辛巳の八月秋山中行

卷之三

向處よりおまへ
船の躰を承

宋文

卷之三

卷之二

事と申すが、秋の葉も今でも

卷之三

靖
蛉

二

朱
華

雨の木葉を落す秋の夜の
情愁の多い空の音色や秋の夜の
情愁がよみがへぬ舟のうき

三

卷之三

日を伏せても一毫もあきらめぬ

卷之三

松虫

柳子厚集卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

五

葉の緑墨

七

卷之三

鈴虫

雪の日も少しあつ居たれば居まく昔のたゞ
屋敷の毛竹の左書き傳筆あり著

卷之三

本居宣長著「日本書紀」

平
秋
月

卷之二

卷之二

卷之三

接牌仲秋より暮秋之頃十日を経て人馬の内
外相次ぎ而の事に拘らず其の事はかくもせぬと
おもひ出でる事の上うかづきは坐すが切つたる事
あら爲めりと聞かむる所也と申御體也

おとち友八半身

卷四

麻衣や都より生すがりの在

吉柿

都と城人の友やきよく在

三毛城

育のあら文の考和がりくす

研月

都ノ子の在とあらはれ

薑

草のあら自子テ是がりくす

都別

はせきせ さうしハセキセラシテセキセ、 セキセ

ハセ

金を保まうとあらはれあり

鑑

六角のす

いふちあら一二あらうもとチヨンと古折と保まをきりと
と云小篠と入きあらうと小児の貌しきをのぞみいは
すがりあらう色とくわうとギイと云ハするきのちきく
篠あらう赤ギイスとむらう續きうるのユサをまか藤り

中のが原の考と云附何。・萬物・経緯
経緯の二字をのべ考もとあらと訓も

多くあらひすきをぬゆのあらと考

唐藝

取のまこと保めりとくはりと考

唐考

経緯あらや本篠の叫もとまくと

素角

保後石墨のあらよこくと

破鷹

ほくあらやタヌリとくとくのあく

松曉

竈馬 いふ。うち茎のまこととくらあらうとあらうと井、ゴミスア

利と多和の御庭考とある。・(利と多和の御庭考とある。)

豪うかと小溝考とある。・(豪うかと小溝考とある。)

篇

蟬

まづやかにかゝる蟬の聲りうへ

家美

かづらきやあはれや、残り上 古歌集

せのあはれと月が、お蟬うれ、 落丸

茶立虫

居坐すと茶立虫、落葉虫

トモ一氣

唐虫

落葉のうさぎのうんありのこは虫

トモ一氣

糸虫よ、落葉のうさぎのこは虫

トモ一氣

放しくる落葉のうさぎのこは虫

トモ一氣

落葉再びよ、落葉のうさぎのこは虫

トモ一氣

唐虫内のうさぎのこは虫

トモ一氣

蠶

かづらきのうさぎの黒あはれの虫

トモ一氣

蠶蟬よ、うつうつと、落葉虫

トモ一氣

いづくまの、おはなへ、落葉虫

トモ一氣

蠶蟬よ、うつうつと、落葉虫

トモ一氣

うつうつと、落葉よ、落葉よ、落葉よ

トモ一氣

藻住虫

増 我のうちの蟬あはれをくじら秋あはれ

落葉の落葉あはれをくじら秋あはれ

のうそつくるあはれ

トモの注は秋あはれ落葉あはれをくじら小秋あ

のうそつくるあはれをくじら秋あはれをく

落葉の虫あはれや、落葉をたゞうへ

文種

庭

藻の葉をあらわす布られ

鰐舟子

藻の葉をあらわす布られ

鰐父

管巻虫

管 江車の便スイトと云ひテスウイトンと云ひムト
時雄の美あつ中元の時候夜車はゆきを御車をま
くり出でゝ裏より便出でる事と云又ズイチヨモリ

シテヤ物や形ぢうる事と云ふ事

相左

寝つきや打り手事と近い事

健善

稻 稲官裏車の便バツタカでまき、魚うち荷も行ふ
持を持てまくらへうづくらへうづくらへうづくらへ
江車の鬼走ちを走らしもよれあり言ふ蟹舟

稻巻

一矢稻官裏車の便バツタカでまき、魚うち荷も行ふ
持を持てまくらへうづくらへうづくらへうづくらへ

稻巻

の字

稻巻や承ちよまく事かの

仕合

稻巻や承ちよまく事かの

ムサ

仕合

魚

魚かくや海色崩り月夜にし

ムサ

仕合

風の里へやくせんの葉——虫の音 イツヒ 胡

戸をさへ寐起る易——虫の宿 テハ雪山

掃く所へ雪をすくぬる魚、灌河

修業の事もつづる其面トサ、十條

蓑魚

蓑魚の鳴きよめうの灯——ふ

みれ魚の音よかくうや練のうち

蓑魚の音よかくうや練のうち

蓑魚の鳴く夜の夜の夜の夜

蓑魚の鳴く夜の夜の夜の夜

蓑魚の鳴く夜の夜の夜の夜

蓑魚の鳴く夜の夜の夜の夜

蓑魚の音よかくうや練のうち

蓑魚の音よかくうや練のうち

蓑魚の音よかくうや練のうち

蓑魚の音よかくうや練のうち

蓑魚の音よかくうや練のうち

蓑魚の音よかくうや練のうち

螽

蓑魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

あめ魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

あめ魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

あめ魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

あめ魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

あめ魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

あめ魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

あめ魚の鳴く雨の月夜——蛾月子

甲虫送九

征左翁近——田翁のむけ送り

お燈ともや田の虫とも人の虫

田の虫とも人の虫とも人の虫

田の虫とも人の虫とも人の虫

田の虫とも人の虫とも人の虫

田の虫とも人の虫とも人の虫

春調

素力

徐友

立候すとてのもの中より虫より

門詰り田の虫不るをもきこられ

菜文

蛭をくぬ田や田の虫あらむ是

卷一

通文

ちの二部も此處もまことに虫より

月暮

蚯蚓鳴

多々印をやまめ一後やまめ鳴
多々印をやまめ一後やまめ鳴

壁風

多々印をやまめ一後やまめ鳴

馬室

多々印をやまめ一後やまめ鳴

種好

鰐

鱗半身の尾小手を解ひける事あり味良かく生で
トあるく三四尺の鱗の九分浦にて多く生む

山雪

半身の尾小手を解ひける事あり味良かく生で

山雪

慶暑ノ節

七肩の中央

龜鵠

鷹鳥ヲ祭

〔圖〕鷹毛を身掌の裏に裏の候古用のせあら往來の事
をやうんと欲あらとせよ其をとあらと食す事の人の言
ふ時すこし先代古をもるの人を汝づよむるえ
用ひて皆を戮を行ふと時の令は終ふあり

鷹毛を身掌の裏に裏の候古用の事

山の風

梅英子

鳥屋出ノ鷹

皮毛をりゆううちを下す毛をあらとを取るあり

裏の本を身掌の裏を下す毛をあらとを取るあり

宋武

松風よりも鷹の毛を出る所

壁風

鷹ノ山別

山鷹の巣を立たさず

道風也、氣もすこしの山鷹の山ある

下サ

風も強むやう生や鷹の山のれ

以先

二三種も輪も輪も鷹也ふあせ

喜岳

ゆきを見えし鷹の山のせば

喜洲

東風く風

空を吹り山をあく 鷹の音

喜波内

鷹 手

翼を引く鷹とりふすとおき我網の鷹と云あり鷹ハ

支々人體をなすかよる鷹は其手を秋も山をあき城を

そらすむものあり其事は國を主大網を付のまつて

岩の草木の手をねむ手をひき手をあわせをかくりすあり
近づくと云おほはる古峰生もおれをもる古鳥枝の小文ひ
いづみをだ。骨山は云ハ鷹手をもとめ我網の手をもとめ
まともういは出鷹うつよめうとありハはむをも。お

鷹手の手をひき手をひき手をひき

翁

鷹手の手をひき手をひき手をひき手をひき

翁

初 鷹

初鷹初冬自處云とお出の事もすくめくいふを

初鷹の事もすくいきむる事も

雪 純

初鳥狩

初鳥狩の事もすくいきむる事も

優 之

鳩 吹

山鳩ハ秋もうひに鳴けハ人鳩のすうをへて鳴を合

とむ庵
やあらわ

焼く事の事もやたらに表のうけ

兼稚子

焼く事の事もやたらに表のうけ

兼稚子

やうじの尾因よりや神の毒

弓人

焼く事の事もやたらに表のうけ

雪鈴

はうじのきり大あやまちや推う本

古棠

焼く事の事もやあほせ自のまへ難本山

一翁

焼く事の事もやあほせ自のまへ難本山

一翁

焼く事の事もやあほせ自のまへ難本山

一翁

熱アツ
麥ハキ

焼米

焼米や皆々食程とつはりく

末燒

やき米や身の歩程とつはりく

文里

焼米や皆の食程とつはりく

トサ

やき米や皆の食程とつはりく

末有

焼米や人の身の食程とつはりく

末有

焼米や人の身の食程とつはりく

公成

焼米や人の身の食程とつはりく

吉左儀

夏ゆく葉の樹のうちや秋のうち

ア麦名

秋ノ空

秋ノ日

秋の日はやまとまゝひまづれ入にれ上毛

浅衣

秋の日は晴れと悲愁と秋の風情

双魚

秋ノ山 番翠の音中は頃て秋の山 来居

定を失ひて落葉の吹きけり山 一絶

言ふ事なく空すかまく秋の山 幸

ト

秋ノ水

却く草木を落すははる秋の水 幸

ト

霜の雲

自の御よつてのうきやかな水 嵩

ト

月

旅波をなぐるははる秋の水 古丈

ト

月

船のみは波を西指をあまむる幸、古來

八月

牛馬破綻を曰作秋。古日月春星は今い斗度を
建中の食事は樂志。回酒を綱あり時物皆綱編す。

○葉有とハ秋月あり肅敷の葉生一百卉葉生萬葉有
葉有と云々累下。葉有と稱也。增葉月。秋月有。月
足月。仲秋。南呂。壯月。中律。經有木の葉有と有つ
ゆゑ葉有と云々。もと南呂が八月の律也。

八月や日暮よ夜や月升りいろ 古葉

叶十

八朔 ありむの從ひ。經行ノ名

八月や日命のえゆる反雨。古

葉

八月の秋子葉有と教うる

葉

竹ノ春

作湯口向竹、宵を以て
妻をもむる

春の仲は日暮よ志望に叶の事

甘草

人を賣り、蟬居候もや竹り事

天

泰山

時良

蟬鳴く夜の竹の音、叶の事

月

星

愛も叶ひぬをうきゆ竹の事

上サ

五美

色うる叶木の中や叶の事

一

白露ノ節

秋の言

天中ノ節

八月一日あり七月晦の生糸の方の木を伐りて巣子

押

其火

盗病

口舌の災を除く事

水村祭

一月二日より四日まで、堺天神祭

三日四日五日六日

北野祭

四月芳名は五月の日、葛原院と味氏寺の

社把き取て神を供せ

一月

白鬚ノ開帳

立日山門の儀

敦賀祭

奉は太神、誠ち玉殿祭、祇より祭神

司召

仲哀天皇祭、八月十日より

公

十一月寒帝祭、四月搬附の奏の人を推定する

延暦寺を主として、

行なめることある

何ゆか自然生ずる事

日

不油

國石鄙をうめ事

出立事

雪約

在市をうめ事

國石

イツ
君友

嘗て歌を主ひ皆一連の圖め
花凋

圖めのちりよ行其國治

今

けを放つ事無く放生会十日

其の時大甚焉の外力ゆきを放生の時残る多くの人を
殺せし者多矣其事行ふべきあると遠宣ゆきかたな無事法
園にてはまく行ひて其事は放生の時

行ふ處あひに放生門を守らむ事

下サ 花月

人立地の事無く放生の橋の上

大津祭 事多しを放つ事の中
下サ 水産

放生會 放生会同向の花子

下サ 以足

肩生子の橋のとおりぬ放生会、玉清

身のまゝの花子の風寄室で放生會、金不老

舞の舞も交うて元や放生会、乙雅

花子の同一部の放生会、下毛梅左

事生の心もえをひき生會、猪羨子

阿野津八幡祭十五日 志賀八幡祭同日

豊浦祭同日長門五豊浦 宇佐祭同日

箱崎祭同日能前 桐弓

名月

月　名まき肉・あひしの肉・牛名肉・猪西肉・秋肉・肉
のさやう・さやけき・小里肉十四月を云十五日秋を望月と
之すあり。十五夜の肉・立待の肉十七夜有・尾待肉十八夜。
アリ・あち肉十九夜・弓张肉・肉弓のま上弦下弦の弓を弓と
いふ事あり。肉弓三月・肉の舟あき守舟をのぶすあり。肉の舟え
滿月をのぼり。月の舟・玉兔吳公あり月中よ八景の急毛
とひづる。内の桂吳公あり。玉桂肉中よ三足の桂柳と云
者哉。猿猿あき仙女の名より仙翁木をぬきみて月中よ
うそせんものあり。月の名よあるべ・桂男吳別とい
ふ仙人月中よ桂の名を桂男とひづる。内の猿或人穴よ入て
見らうよ子の根をまきの金くまき白猿玉筋オノミタの
仲の根をえひだすあり。またあきをうるすあり。瓊嶺世界よ肉月の
うほりあきを死むをゆる

○月の歎　二日月がうつるまきのうらわをうらどり
○月の雪　月のよそうの比よりあそび音のゆうゆうがす
○女日亥申・女三辰の害夜中あせ月の出るはづあり
○月の夜月を歎きうて・星月夜・夕月夜・盈のまへ

•夕月日双星•庚寅夜

名前や筆名をもつての筆葉

甘茶

四

名内や蟹をも油のみ残りろ
的有や世々を難せし酒の破
名内や蟹居の事に筆せしむ

廿四

名前や髪髪をうるさく思ひ
筋肉や筋肉をうるさく思ひ

名内や志緒の句を波の音

素問

名月や朝代うなまひのく 支

天水竹

名月や橋のうらわの角 携

上毛種進

名月や風よ吹けの裏の山、心星

待宵

まつ宵を空の山よおせめり

陈良

今日の月

うす月夜と月の光り

山古

旅宿を川岸へまわる月の角

芳艸
大川を階のあすくまふの月

トサ三郎

月今宵

志老を月よとまくとあらむ

小金
藤孝

月見

月見る輝居や月見る衣 連里子

め向

大糸やさう月見るわざと軍

め白

糸糸をさむれ月見る月見る

喜左衛門

糸糸をさむれ月見る月見る

松城

月ノ雲

ちまくも満月は月の雪

山子

ほのかきくわくの月の雪

芳艸

海まで水をまくる船や月のうね

トサ三郎

月の雨

種もさきの音が月の雨

源氏

十六郎

向ひの色や多きは、誰もをかねて見る。

葉居

十六夜

立事も持よいとすふゆううま

峰風

まくらや草むらのよもぎ

ムツ

古槐

月、雲

十六夜の景さむをやせものま

モレ

宣朗

居待月

いまとひやまくの月を

モレ

翠

秋の月

樹のあくびめを落葉

モレ

秋風

秋の月

川筋のあくびめを落葉

モレ

秋風

秋の月

樹のあくびめを落葉

モレ

秋風

堂大臣祭

十日、五條坊門町の西より御移殿上り

十條

駒牽

馬一頭と朱雀院の木忌より御牽引を十日とする(前附)

十日

少許御車の車を以て先走る上に御車の御文を表す墨で公馬
玉不渡外より馬を絆たる玉のタテつあととある。御車を走らせて
一舞を云ふ舞の御車をハ引かの御車を以て御車を以て御車を走らせて
上揚げ之を以てへせんかとせらる。十七日ハ甲斐小種族の御車の幸處
其日ももさう。少些の御車の幸處の御車の御車の幸處
廿三日佐渡の金舟其處が八日から上陸並半七初り

駒牽也。之れ優長未良可も

不 由

駒牽也。や莫の清めを學び休む

峰 風

駒迎

日二つ駒の川の河原や約をく トサ若隣
人を知り人よあらまて約をく 不二丸

彼岸

手織絣名をもて彼岸詣る事 ちん

御靈祭

十八日ハ此の・乗名祭十八日いせ

秋分の節

ハ月の

死活林カツリの祭

増穂熊の神はあらわしの社とそひる事より毎年
死刑をきるが五刑を行つて是死罪の者の

退基カツキよりうそりと 聖の注カツ

神大忌祭

羅古活カツ死活林カツ、死活林カツ麦高

坐つる度科カツ、死活林カツ、素心

蛇穴スナモリ入

因カツ春秋の月當もして歩を收め蟻虫戸を閉む候
妻カツの音カツんよ步て秋カツ彼岸カツ入と云

蛇スナ穴モリ入スナモリ秋カツ見カツ官カツ入

雪カツ約

蛇スナ穴モリ入スナモリ秋カツ見カツ官カツ入

立カツ雪

蛇スナ穴モリ入スナモリ秋カツ見カツ官カツ入スナモリ立カツ雪

蛇スナ穴モリ入スナモリ秋カツ見カツ官カツ入スナモリ立カツ雪

穴モリ入スナモリ種カツや桂カツ木カツ不カツぬけカツよカツ花潤カツ、
の音カツうらとカツの音カツすひう蝶カツの丸カツ来豐カツ

釋奠

上丁日孔子弟子十哲を

秋社

秋カツの前候カツのき戊カツの日あり立穀カツの神カツをあつて日カツ
主考立穀カツの土カツを封カツす社カツを建カツて候カツを建カツて禹貢カツの注カツ

いろたりと事

龍田姫

貞祐云秋の色を深歩き送化の神ことあり

セ

因うほりの山よ秋や龍田姫

セ

枯葉

萬葉ハ秋ひとむしらうしめ

双岳

秋の宮 中まのゆす

初紅葉

ちふる處の粉を拂トレ初紅葉

立字

初のり一而まきえう初紅葉

由像

神垣や松よのきうの神をくわ

以見

芙蓉

風景木芙蓉あり本草云本草の名アリハカ月名アリ

又安日色芙蓉を芙蓉亦云秀人翁荷の名アリ

芙蓉生丁度そりのまき芙蓉也

ナコヤ 破雨

二の花の記急工拂ふふううれ

秋夕 嵐山

絶吹り聲へらゆる芙蓉あり季々峰也
垣石もや雨の芙蓉の之は都

ナシ 沢家

芙蓉生丁度そりのまき芙蓉也

上毛牧鷹

芙蓉生丁度そりのまき芙蓉也

イツ 重露

雨木の聲の聲を候芙蓉也

ナニ 信

木犀花

木犀の声の声を候木犀花也

ダル 信

卷之三

木犀やさかづら 沢むねの匂ひを蕉葉
眼まきぬうち木犀の匂ひこれ 金葉室

蒲 葵

紫爵

卷三

二葉のうすい葉をもつて又一種生えます
小葉のうち林生のもの生えます葉をもつて

國朝詩集

下葉うち秋の風に吹き落し
三葉のうちに葉を落すが度又一種生長する
小葉が何處か林葉の如く生長する葉を落す事
ありて一重裏小葉

後記を書いたり危なかったり、素心

卷

葉の落り方と熟度との関係

卷之二

卷之三

時計等つきの和専用字は萬字あり万の筆に
目録を以て書をもて用意する所と云ひて

蘇州也有氣球多矣。古吳書

宇治の花園

國

乞固和字浩菴芳之志

玄
鈞

花野

まつゆの事と云ふのを知りて不見之子

うきの日が斜よき午後その東
西よりあ絲々紛るあき、是時八

テハ
雪山

まくらの日の思ひ事も生れ

旅あら旅の奈良を越え

仙
自

卷之三

萬世

母の考案のうまいりやくじを
遠程子

おつまみ。魚介。おつまみ。アヒル肉

四

布志の本

尋
集

卷之三

卷之三

卷

中野の風情が多き也

卷之三

4

樹の語よ此のまゝおなじにせよ。豈川

肉
津

卷之三

蘇東坡詩集卷之三

卷之三

卷之三

三

廣德府

卷之三

種も生ぬ方角志野の風也
大作 著 案

尾花

さへは松の道を走る岸の尾野 一
金之 番

前
言

刈萱の茎の生長と葉の形と
万枝子

舊本卷之二序文

卷之二

川苔草のあらわやゆるうらを

左心

うす苔草や一すくすく秋の花 トナ 花月

花 紫

彙
二月開花とひすきは紫葉あらわゆる花とす
名や葉を種て咲く人ありと云はれ
秋植えの
入唐花をひそめさうなるものハ秋花候と云り
苗を定
余葉ハ多くあるが如トシカナリ宋の宣和御禁物
花
また粉紅及び黄赤の色也有り
や小長葉薄アキラカモ
葉く莢をもつて形圓央あり
葉白毛ふ難可

壇 特 花

花や葉やもする根のみする

葉種

紫 華

ダンドウ
花や葉やもする根のみする
をよの花と云

枝や葉の事は無事あまはふ花とれ

葉事

金

木の葉の事のやうな紫花され 上毛 心星

牡丹根

根の葉の事のやうな紫花され 上毛 心星

秋海棠

根の葉の事のやうな紫花され 上毛 心星

牡丹根

根の葉の事のやうな紫花され 上毛 心星

秋海棠

根の葉の事のやうな紫花され 上毛 心星

葛

生葛・白葛・茶・玉生葛・葛子
葛の根を下る

温水を浴する葛を上より葛の根

尋豆

山湯を浴する葛を一葛の分

秋之

つる生の海苔をやくもみを包む也 イウヒ郎

尋豆

萬葉歌謡卷之三

送ふ萬葉のり来や秋の物語をす トモ 来世

草の色付

引きぬめ出がや叶の色付く

花 檀 えきのうのあらわする色を檀され

萬葉

野菊

鳳仙花

ふきくわ松をうめむすて風仙花

萬葉

雞頭花

まきくわ松をうめむすて風仙花

古 察松

金剛草

マツナギ
萬葉の山生は生をうめむすて

松をうめむすて風仙花

萬葉

水引の花

あひの草うとまえのさうりハ

水引の花

萬葉

縷
紅

茎葉をうとまえのさうりハ

萬葉

水引の花

萬葉の花

萬葉

鴈來紅

一枝うつうの花を用へて

萬葉

萬葉の花を用へて

萬葉

万葉の花を用へて

萬葉

雨の音へ心があつせむる處を尋ねて

水巻

佳若

あまき

次枝枝多く温ぬるさくハ浅き水の中では生むる花きらう
うかでちきくもしきむる

通草

ア
ケビ

あらわ用ひを難きる通草がヒタツ清潤

温水のみを運ぶ浅し画面壁毛

壁風

蓼ノ花

おやう日はあしく希一蓼り色

采葉

採行す井筒の水や蓼り色

一雨

齒香の實

和名くせのおりうちうらがあひの美のよしとて
ちきく助候なり

冬瓜

カモ

南瓜ト冬瓜はりぬる東の産

大都近

烏瓜

エツキ

葉性や秋うつぐにさく、うきの

ウサ

青交

牛房曳

角傍毛うづくまくす牛房引

トモ

山古

小室子不思議の牛房の形、思

成

うああふう業えひ事ぬ生業ハ 美子子

田使すうじよくや牛而實 宣約

いきりきと社のまほぬ生業引

文志

麻の代業すもまほ小芋代 古 宵

裂了る生芋芋多様をもむ根尾 金室曉

零餘子 箕を薙すもひ落せめのまば

勝つあくまむ性のめうが 上毛玉柱

宿すもひらしめのあゆを除 テハ采角

すの茅の仲すもまほめうご 金露发

あ委子ゆきすもまほまほのあくれ

玉情

舊推古天皇六年秋八月皇太子奏了曰某等を民を

貴ふ事物をす厚く當奉を候ひて天皇御うじを
是をもひて即皇太子自ら群臣を仰て其よ出でよ入坐

某等の種を薙す某等の根を下すトキニ

歌くうへ唐きをアタマや茅ウリ

甘葉

菜 堀

カカリヤス

櫻あすく多く出る。傳承必用の物を也に於て通達

刈あや近江河の人ようも。上サ而相

う主あやと云う刈をもれ葉の黄テ采高

蓋草

山中する多

刈あや近江河の人ようも。上サ而相

う主あやと云う刈をもれ葉の黄テ采高

列あやあらう。仲を底もき

巢
竹

木綿取

極く是を御あつて來ざり申す方の極の事
四つを何と白緒を使ひ當て是を極め上に申す事

藝文
卷之二

乙巳仲夏西蜀小吏之本猶在。乞多達面
承。某等一念私衷。失於未卽。江下廿二日

鬼
灯

墨竹や菜峰の如きをうけ
連理子

若
良

風流月夜の手帳 菓子
おもてなしの手帳 山雪

黑譯文卷之三

卷之三

かのうをうながすの意の良

下
卷

次から軍事専門学校を

ヒクチ
素肉

菜種時

宋人賦詩之第一葉種詩

三
左

譜、之、參、考、付、於、書、中、葉、種、前、

間引菜

アリ葉の處より家を移す事もアリ

衣 打

卷之三

大根蒔

詩詞一
丁巳年夏月大根前

引葉の處より定めらるまじり

金里水

在里白水

山の先や後ろに點灯する事
極端に空氣をもじるためこれと風成
麻生、またてはむらの小松點
火の点す沙城の街や夜點下サ
山の端に小雪の行進の夜、細雪
高野の雪の夜の點灯の所、十徳
寺の雪の夜の點燈の所、
朝まで雪をもじるため、
費税

鶴

川東北の事小舟船不毛山古
川越ハ二年丁度ハ小舟船、種好
ヒテテ之を以て賣る者有り船ハテハ達河
アラ・通う船也。今アラ・テアラアモ
ノ納
高引の事多々有リ候事
引手の事御の事也アモ納
時至後事の事也アモ納
船也
此行ノ事也アモ納
業居

稻雀

うらの鳥は茅や雪うづら

春晴

返しや里し生る赤田を移雀

ありめ

様にあそびたりぬ鶴がる上サ

也英

鶴の羽うき。川原鶴。曉鶴。むと鶴。鶴つき網。鶴づね

鳴

きかの名先是す時り鳴

喜陽

時あくやさくはなまく喜陽

喜陽

時立や空へ是すゆゑの里

喜陽

山の鐘立風のゆくや時り

喜陽

時立や山のうきの山まで

喜陽

木を落とす風立やまくは時り

喜陽

木立や木立へまくは時り

喜陽

打立てまくは時立や時り

喜陽

時立てまくは時立や時り

喜陽

新市一社坐す時立々日ひれ

喜陽

時立時立時立時立時立時立

喜陽

玄鳥歸

秋社りゆゆる

乙季の時立時立時立時立

喜陽

喜陽の時立時立時立時立

喜陽

雅

原序・自序・海序・蓋之序

居のまゝ生をまつて死はばくとも
詔文
浮かびゆきよのう面や處の考
仙舟
居の朝、麻衣も笑ひ計りれど、み竹
志純のあはれを可いにあつた事、甚矣
痛き耳よおきをとめぬて更復有トサ森森
近きと聞ひあり候きが一暮の間、山壹
まちのよひを考へるの種 ヒタチ双武

葵
食

小鳥渡

月の夜はとてあらむ居居の事
義経のさきうきとく夜色
日は暮れまじめをほしてゆる
ゆく事もや雨烟の多き里
ゆのこゑのちらまかせりゆる事
来の音はいを城の幕やほり事 テハ接承
事もや一物もそぞほり事 幸
竹文

解説の文

雨山

色鳥

鶴・五十雀・不思・ひそく・鶴鶴・ひそく・もと
をう白・ひし鳥・ぬう鳥・ひそく・う

卷之六

手
稿

のうすきつねのうすきつねのうすきつねのう

詩
城

おもやまとの間より

七
卷

鵠

卷之三

此の事は余りもさうあるべ

卷之十一

卷之四

翁
比
外
十

うの日の本本ををかからら

卷之三

掠鳥

おまえの隣の洋子は、
おまえの隣の洋子は、

卷之二

豆廻鳥

清浦は六羽の傳ひを至まし

仙肉

豆鳥

一見之者皆知其為虎也

卷之三

鴻

是種は樹の加減さく頗る多

少
貴

山雀

金匱要略

卷之二

山雀の声や日ひなに困りと
秀子子

ゆきはるかに生居せり

山林や山の上のやら山のとも
無事

山莊子經年未有之嘗也。其擇譽

卷之三

萬葉集卷之三

原之書亦可見矣

秀の事に、後日又別の書面附
、

卷之三

居る事の出来ず多うござります。樹英子

長安在北漢在南國自以一乘革

らつて其と云若玉造の天王寺を建てる時也。釋迦

卷之三

本ほきやあひの頃は春を知る イツ士

國本家の二狗と日本、英豪も
トサ 広義

木の葉のやうなやうな葉の葉

鶴鳴や朝日又向て岩の上へ

卷之三

杪
巢

卷之三

杪
巢

賈

時後回向第一名勝一高僧と申す。元

やがておはぎ屋子のいふを承

卷之二

猶有七鈞馬也。而之也。

卷一

何處か是處を據の志致ひ候。一
土

諸事やきの年々の書
孝子記

鵝草莖

諸事をきのう年中大風浪
一月未だ

鵝の早贅
枝葉繁り多きを取て子孫の立
云々等うへゆきあら。

一七
木の枝、枝葉、葉の聲

道の本ノ經の事孰ノ人也——多喜

小鷹

鷹瓦タカモリは、小雀コマツの秋アキあり。生種セイシキ甚多シテハ。小雀コマツ物モノ。つま。さうす。あう。單シン生ヨウりし。云クモハ、秋葉アキハうるとう。我ガりすうりさ。相シマ小雀コマツくつも。

鶴鷹 うづらをとる事あり

いさみ立野とあそびかう 菊潭

卷一
八

河力

鹿

卷之三

萍 車宮遊侍云何幕ハ何様の儀様子は能湯老湯の云
ふ事より考へて之を考へて之を考へて之を考へて之を考へて

化生するといふのをもとにして、此の種の魚は
寝てゐる子で、成立早速ハ
寝てゐる子で、あくまでも前からいふ田沼がよし、是れがうなづ
て、本川がまことに寝てゐる子で、まへておちつて、渡せ考へ
得るあり、田沼あくまでも水玉子の毛をすり替へ
だとうとういとおき引き後あり、此種考究は、唐の月六月
蒸といふやうなあります。——本川の水と云ふ事

泥水を廻るのまゝに廉介 古橋宣
宵もの月都あり侍のう重蔵波子
木波より湯ゆくや鳴鶴若 挑る
に暮す一枝やぬの向むきゆけ
トサ 道清

滋

鮀

川舟を走らす事無く、峰の森下毛一龜
の事と聞かず。まことに、か車ムツ文起
物もまた雨の趣を停かう。其一通
船人等の往來の事あり。又其時が、四机
取うちの峯の周辺や峰の森、市街
は船の往来する所也。秋の色トサ
まし船の聲を掛かう。下りりて、泰山
山門や船は走りゆき。其の後、旭高
湯點の舟は下りしき事未だ。幸運

川ゆるせをさうし 船も宿より 童子 淡

傷き木のめづつ玉座を船もす テハ 嵐風

すく風うちのけと船もす、海傍

下り築 畠塚 木の葉や下り築 王史江

木葉の夜あさひにむし下り築 上サ 梅室

崩築 水波せよ壇ひきそよ崩築 今井 花調

廉 吳名あす 四廉をきせきといふすはりとらる中景

行天皇の事と白廉をあらわせきと訓せり又まことと雄

若きいふあり若のふを云持て若をうせきまさるといふ

ハホタヌアリト 蘭

ゆ人のあまね衣ひちつ一若つ考 其岳

半身合を管多々若葉と拂ふ

十六

御

若の鳴くみへ内表を拂ふ

一四

松室

里ちづく葉を叶ふ若の事

七

松林

月の若葉の事多くて若き事

二

事多

月の若葉の事多くて若き事

下十

條

若葉やがくよ雪を山をす

一四

雪

下まの若葉群をせすらす若

一四

雪

鹿笛

初
鮑

之書物。贊予市井。細仲寫。七八
立風。

山を下りて、物騒がず歩く。下り
暮山

剛相州也。多子也。少子雖少，一束卷。

初體や切々へ、うすい川家出候。筆者子

同や體をせぬ事一歩きり。嘗て済内

初體より是の道の日をもめけまし 不毛の草

芭湖の名産なり木製の、之尺小舟を名尺と
呼ぶ。此舟の出處は江健の手作にて、其舟

江鮑

まことに、御みそめの佳品なり。月雨秋うらら
湯をくまめに、川口上り篠をうち。又古の網走を

味者。尋之。莫知所。乃以爲魚。

有心

靈

四鰓魚和名須ミ未字了物を波神と名づけ小
ちの性好古と名づく者才不^レ也之を波神
二三尺工船のもの也^レ云川船之勝多く
は船ハお^レササ^レく水傍一法至四時之半^レ行

小鶴引

御文庫藏書

沙魚

參拜小室、網上織ひ

空
宗

野

暴風八月上吹大風

木也約の、生と船を引く

波濤

麦はのいと干し草かうめ

ナコ

一月

野はのままでせきけられ

ナコ

歩中保

橋もくやせかねての庭の松

ナコ

梅園

初

汝

八角史のままであ

田を守

田の色づく。田を刈る。稻葉

金文

種

絆はくわく田のさく

花

闊

田の色付

色のはく田へあままで西月赤

智

山

田の色づくやま風うれ日和

ヒタチ

菜

いろはくやまの田の風うら風

ヒタチ

友

タ風やむづく小田サツツ

ヒタチ

一萬

新都よむきうきく稻種小毛山古

ヒタチ

市

稻

桂木くわく木くく稻葉

ヒタチ

以

田を狩

桂木くわく木くく稻葉

ヒタチ

以

見沙

落穂

卷之三

本居宣長著「實入を知る」篇註に
於て西洋の書の也する處種々考

周易

朱子語類卷之三十一

家
和

新編
卷之三

三
頌

相後者人多知之殊種少

卷之二

おのづかの操作能性

子布

（生糸ある種の種類）

卷之三

林の木々八木種子一筋水

卷之三

稻
進

星をもじりて蓮の花を移案の意にして蓮を
表すとするものである。

都之日之吉之多之鶴也

32

卷之三

文志

案山子

增之以人形

卷之六

ほれとて水辺にあけたのがちとぞうして書を出
蒿がくわき引抜かねて木をばく縦引きのもの
ゆゑよつて我あらうとそうちみのものあれど
玄宥の山田ちとぞうして傳教よろしくておはなは
の人物とひきうちあるるるおもて年老いあはせハニヤハの
えりをまきまく川本山老人のあはせを紹介するの事す

重慶府小橋堂大正元年二月二日
了義行書

增

附說

或もしまでそよげを拂ひ
文接承

鳥劫オドリ
雨風アマツクのりふやかしの三日
村屋

風を吹くるをもとめゆき幼童花あ

閑居

けりあや極めぬるをもとめし

案居

添水旅人をまかすのせむはみうす
高麗女

草木森のこゑもまつむるはみうす
素月

さき町へ歩きはまゆるはみうす
古棠

風うちの衣はまゆるはみうす
トサ貞忠

あすまちのひづきはみうす
一尾

引板

またまちのひづきはみうす
指要

木の音代

かうすや内ひ引板、榜友

山皆やひよあくらく、
トサ一尾

事もつゝあ焉引板は交う尾ヒツ五空

重ねあき小爐堂ひかず第2回ひがいもす

増

まくまく雨すらひるめへしば

大接承

熱をしきそようじを葉へ

村屋

鳥劫

おうづのりふやかしの三日

格闘

雨風そよぐあやまと

陽氣

風を吹ふすあやまと

狂氣

うきの船の入らむと

驚愕

せのあやねの内はなむと

寒窟

添水

旅人をまかうむる湯みうる奈

高安

喜む林のこちよつての湯み

素月

山

さき町へ歩ゆく家ゆる湯み

古索

風うむる夜は吉野あきらむらば

トサ貞惠

あすなまくまつまへ湯みゆる金一

第一

引板

あたまとまえをもむれ引板の事、指要

木の音代樹うづや内の引板、樹友

山野やひよあくろくをとるトサ一

空

寒きつゝあむ引板の空ア尾

ムツ五空

差異て引板の音又とまうべ

吉清

引板の音方へと反をめぐり、古樂

方角の音をめぐらしむる者

テハ

阿謫

音の音もあらむて音のあと

トモ

一毫

聲の音をめぐり引板の音、松風

木音山や日暮の音めぐり音、未幾

若城より音の繩や音の内古

支州

川音山音の音を鳴るべ、北枝

引板のねむう音もあらむれ

トサ

芸芸

鳴子

燒

帛

燒帛や乃も春とろよ叶の音

金風

やき生ひ音風ハ峰すよ吹あらむ

トサ

金月

燒帛や風上ハ雨もあらむれ

ト外

戸を志めくとく夜もあらん秋の音

己辰

季も行はぬめに秋め

エチ

竹文

季も行はぬめに秋め

ト毛

一絃

枯枝ようさくようり草木秋の音

菊

翁

逝ああらぬようすくさんひ葉の音

古

聖坡

本の遠く風もよみがへて秋の音

洛陽

秋の暮

長月

長月の秋や少秋も暮ろく

古

是考

七内の宣社全そぞに後しに

古

金

文種

七内や四人者のかなをそそ

古

花潤

七月や九月の山火事にあらし

トサ

芭翁

八月や九月の山火事にあらし

古

御

燈

【國】二日より三月のめぐれ斗

火を

不堪田の奏

【國】

七日或ひ五日出でる諸田の田の株色若く

不堪田の奏

七日或ひ五日出でる諸田の田の株色若く

やまくよみあす

ふ塙内奏せぬ季の跡をさす

古

桂の宮相撲

八月より、夏も冬の山西の洞窟の

古

泉涌寺舍利會

八月世尊入滅がちづけ、
付運良鬼坐

之一擧を食利あらわらうる

宝令式行うる詔旨をせ修る

重陽宴

重九・茱萸酒・茱萸の囊・茱萸の宴

古

外の場の数ちうれ内丸もと重湯もとすおふ
ややすゝもとへ標致をもとて文代りしゆ行う御前の方
上葉莢の序たゞキ御前上葉莢をあき葉医上葉
酒をもとめあらわらうる是を重ゆの宴とも葉の
宴もとめあらわらうる國のふる葉の湯を國の葉莢の序をかくる
年を費長角うれ葉の桓景王大丁へて御前の方

溫酒，即以酒燙熱，或以酒燙熱後，再斟入杯中。

— ፳፻፲፭ ዓ.ም. ከፃ፻፲፭ ዓ.ም. በ፩፻፲፭ ዓ.ም.

後病小兒多有渴渴的病

禁酒。禁酒。

高麗人之逃亡者多匿於中國。

上曾
藏雜

enormous number of people? - I think most of them are
men, who go to town, and work, and come home

乙身內之氣，則其氣自和，而無病矣。故曰：「人以天地之氣生，故無不和。」

海藏廻

毘沙門天の御子の内に兎童小石を以て孔の一つを穿ち
内にえりて力を助常各徳をもたらすといふと云ひ
トテナリミ素肉を投入せしと傳説也。むく力つよき者ハ
丹波守が其の事あつて出でて竹刀をばらしよ猿夜を何うもかみふあ能くを
だい縛りと稱す。序のあら端をあくと見ゆる所

手の生れ地をもとせむたまはれ

葉種

醍醐祭

九日能

御香の官祭

因日伏見よりより

神向后を送る

鞍馬祭

同

貴布祢祭・生玉

同日
大坂

四官祭

十日
大津

下鳥羽祭

十日
志方

例幣

十日
奉行

ノ勢の左神主へ幣を奉る事あり

毎年の秋の日未だ生立未だ例幣にて神祇賓へ
り奉る事あり。其の後祭主中臣氏教ト教主まで神
幣を捧げ、出使の日神馬アリテト其の事幣の供
奉院の所付より始まる。其の後神主が室輕被の
人僧尼等より御目より金内をもてて來らる。

例幣や四章をもさる乃釋除

祐之

御幣や本の代りの口とひき

金 素人

御難餅

十二日蓬上人法事を辦り御子の事を掛け財

此刑を宥めらる事ある日未だ有はば自室門の後客を祭
儀ちよ供せよ御子を御の解くゆるなり

手のうち北山さん御縁

朱二丸

圓子一隻餅

卷之三

江蘇徐子思之利益也

卷之三

住吉相撲會

日
十三

住吉の市 同日宝の市と云是あり。神體を以て其一を御神體
御事。一 宝を主と重んずる御法あり。宝幢を
たま 徒子をもてて法事ある所侍り。又
神を冥にすむ事より侍り。

宝の市
河原町の宝の市

下
卷

新編
御文庫

卷之三

西宮樂
升平也
多有人
其事

卷之三

白河集

四

新ほの黒川村毛布の井

花潤

後の名月

豆板角・栗名角・鶏の皮の肉・肉の筋膜
等十三枚のものなり

樹木多生於山地河濱之內

七
卷六

次の如きが御好重文の「内肉」

もまゆは元の木の葉や後の肉

次の回は謡をひき、后の月

辛ノ
莞爾

清民

本をあくすてよまきの店の肉

秀沙

本をあくすてよまきの店の肉

上毛

文鰯

あらのふよきも一月社月毛子喜

ゆきうつむやをすり脂心附、猪圓

あらの肉後うらや豚の月

五英

皮鰯の脂味のもの肉

庭花

人魚の脂味の油り後の肉

古川

豚のあく豆の味や底の肉

葉店

豆のあくのつまやく後味

常陸

十三夜

古
美左

油の豆味の味うすますや十三夜

喜お

豆の味の脂味十三夜

双岳

豆の味の脂味十三夜

岩川

天王寺一乘會

十四日今ハ・岩倉祭

同

小倉祭

十五日

同

栗田口祭

同日是向川橋の東

同

神田明神祭

神田社の大己斐命鑑坐すと左門守ひて怒

豪家延文のめに一通上人三代真教坊

生季りと傳年あり。大御堂橋の東大河神田東と山

丁

木産地神輿上送物を乞うる民子の時神輿
音をうるる者多し其ノ中一隻木舟より其ノ音を

お出で本と太も扇をさうされ

卷之三

人情の葉落のする秋

卷之三

伊勢御遷宮

3

卷之三

卷之三

度會新嘗會十六日

岡崎祭
（同日）東山山口祭

九

呉服祭
天皇の御宇御紀做主を呉國子つと一工女をてらひ
少は足緩身緩是織完織四人の女をすゑさせと空足緩を
ほく十の御形太沖子を起りて三女を津のゆよ御る所
同玉河金波宮織と行焉
トシヒタスカミキリ

夜深了，他還是沒有睡着。

完織祭

山ある中河の事

婆利女祭サヨミツ、室町の西シロヤマ。

廿日立山宿所の西より
中嶺ノ九月ニセイ

菊

梶倉・百葉・猩々葉・太白・碌揚杞・苦竹・金國要
大波若・乙女花・すり芒・翁仲・女花・源志子

葉の度や度よ御きる夜の度 篇

葉の度も浮世のノハナアミ全 古 菓左

山風や松や倒木・かぐのうへ、嘵臺

見あせとちあくさりう内の葉 玉代め

に古一河へまきこまつに重色也、葉載

見あせとちあくさりう危 世道

叶の度も浮世の度よ御きる夜の度 十日葉 朱貞

外題

嫌極や葉をか打ひ打ひ極) 京 左老

極あを日今のりやかくの豆 天空風

修了傳(歌をうじうう葉の花、泰山

残る秋は未だの歌あり葉能り 二葉 庄

葉の度や度もうち葉の度、度、度晴

葉をかくすの物や垣のうち葉能り 上毛野雄

かくすの物や垣のうち葉能り 桂樹園

殘る葉

十日葉葉の度もうち葉能り

叶の度も浮世の度よ御きる夜の度 篇

葉花鳴子

嘆のあらる事と經年日持うる事 下サ 蓋水

御の御事とまつりわざと美きしし 金持此水

七夕の事とまつりわざと美きしし 金持此水

御の御事とまつりわざと美きしし 金持此水

九日小袖

着うさぎの衣
及奈衣

小袖及び日向を歩乃九日うち

不由

雨蓑あま風や九日め小袖とく

傍之

霜降の節 九月の中旬

射獸を祭る

月 美半月の候をもとて獸をもつては是を失
射獸を祭る トシテシテ禽を殺するは是を殺す事也

禮 射の獸を

禽名を獸の総名獸より之より生獸はすと禽と云ふ事
故ニ鷹等獸と云ふ事一程も通トシテ禽と云
すの事を識出する事也

九月の事あり

紅葉

毛見叶・毛あづみち・やぢちる・川の紅葉皆く見寄
たもむじとひもうづくと云て小秋かく

戸城山

毛見葉蒼の衣をもとく匂ひハ 古 宮角

足えひりて御葉下すや峰城一 宮大老

殿系やどもちとひて持すとみ 古 宮脚

ハオリ御葉下す御川邊うれ

古 宮角

萬葉の月の三十六歌集

東洋

かまくらの月の三十六歌集

山古

かまくらの月の三十六歌集

素山

かまくらの月の三十六歌集

金物

月
散

かまくらの月の三十六歌集

金物

旦暮の月の三十六歌集

金物

梅紅葉

金物

櫻紅葉

金物

櫻紅葉

金物

桺

金物

秋の月の三十六歌集

金物

秋の月の三十六歌集

金物

秋の月の三十六歌集

金物

名の木散

金物

萬紅葉

金物

秋の月の三十六歌集

金物

秋の月の三十六歌集

金物

金物

雨の中をすまうに持てよき

すす蕉塗

銀杏 イチジク

きんあん

宿吉や草木衣付の落葉

落葉

麦家

木の實

木を須す子城也木の實

木の實

榎の實

榎の實ちる榎の實をあらひ

榎の實

栗

栗栗・さく栗・ハク栗

栗栗

鮫栗は袖あき狹の里ひうす

古里角

いの栗やまきを争ふばかり場

いの栗

柿

落葉やまきひし入葉ノ人の裏

落葉

艸ち栗やまきひし入葉ノ人の裏

落葉

匂空は室め笑ひとみほしき

匂空

椎の実

椎の實やまきひし入葉ノ人の裏

椎の實

柿

木株・仰木柿・木候・熟柿・甘柿・葉柿

木株・仰木柿

柿よ角せあや出仲つ口ア・胸

文柿

山さく柿よ口ア・タリ和・在山

山

さくかや落柿うづき落葉

落葉

落葉

梅檀の實

はちらや梅檀の實よもぎのぼく

上サ雨相

梅檀や実の馬代うせをモモギ

優

椿の實

庭桜ハシキナリツク櫻の実

了

椿の實

庭桜ハシキナリツク櫻の実

了

果李の實

梅檀ナリ若也まんおよみとすも

了

柘榴

多子さくらうあつ。寒栗

了

栗柿

さくらうとすせぬ松柿

了

胡桃

さくらうれ味の核あるくま

了

梨子

生の浦ナリ。新の妻梨。きのあく。りづの實

了

杼の實

あくらうへや梨子もくあき當す

古善山

本多の孫清母の一人秋月也キアレ

了

こもの立木や朱就吉きくぬきの裏

テハ栗高

杼の実を落すあらモテトモウ。峰田

了

括ナラハ花名栗のあく。寒柿ナリ

サードナラハ

團櫟

本
〔本〕夏中よ多く一月中ハ素の地ナリ故ニ字奉ひ以て
あり葉穀むらむらノリシムトモトモ

さんくや五度までゆきうく イワカズ

さんくや五度までゆきうく イワカズ

了

水

木

枳殼

鑿子桐實

拂ひせらへる極の宣教自此

佳名

新松子

不二九

やうに新ひきのくらむう新宿す
寒の夜の秋月のそは 新ちと

素人

ムク 祛ヒ
ヨシ 樹ニ

三

形も本へをうきゆのんの更入の系
もくの言や是もまたのあらわの 佐松子 山古

棕の實

卷之二

南天寶

文
望

卷之三

一
三

野山の色

新文書

上
卷

野山の錦

新之助は嘗ての如きの

下サ
壽山

未
枯

卷之三

朱子年譜

古
其角

東山文庫

九
抄

卷六

芒散

ヒア度ゆきをす葉のむにの芒

穀考

日の中も秋もひ拂へるに芒

素力

葱草

本石モサ野。風尾草、生子山等石塚の下よ生す
葉ハ葱よりそり反向影下ト鶴がモ是也

芦の穂

芦の穂も秋もア・芦の穂

御身は冥ノホツヒに芒の穂

壁也

被よしも芦の種也モヤ再上ト

全

龍膽

和え茶ミ叶ハ思叶尾毛ウニモロ品モテモ量多
星んぼうもアリミ室家ヒタシ有

龍膽モ茶リムキ日のひとを

ムウ 芳幽

吾亦紅

龍膽モ茶リムキ日のひとを

ムウ 芳幽

意モ体生叶モ出接ケテ志高

トサ 以見

木本美秋一木のひきのアレ

上サ

美秋

老年的色う多キモ出なれモセヒ

上サ

葉空

名古モかすいモやめハ森母

木

淡泊

朱の写メ西日アリカホ赤絵

下毛

雪翠

黄蜀葵

智傳書總毛葉毛茎形狀故名綠毛石子根毛
株アキブキアキアキナギ根毛アキアキナギ根毛

紙を洗くモ増

東北毛の

用立叶

葉毛葉毛根毛アキアキナギ

毛

写のちやとうり名付呼毛み

毛

名二九

老母草の實 老母草の實をもとめしをあらうの實

寒の草を掛ひてあらむあり

豆

豆の内を瘦しりんが八重山のいふ豆

笑む老母の豆の豆の豆の豆

住居

茸狩

茸草・毛草・松茸・芋草・トマト・いぐら

茸特や芭の麻を教志せん

古山房

茸うや少翁の竹、老の草 上毛心屋

茸特や少翁の竹、老の草 上毛心屋

初茸

初茸の豆を降出たる小豆あれ

古智内

初茸の豆を降出たる小豆あれ

古智内

松茸

松茸やくまらん、鼻の先 去去來

松茸やくまらん、鼻の先 去去來

松露

松露やくまらん、鼻の先 去去來

性然

松露やくまらん、鼻の先 去去來

性然

革葉萬葉の豆をねくわ松露やく

名の豆

松露やくまらん、松露やくまらん

イツ核渡

遲稻

あくす・じよちゆ

持度半日未満

金不老

稻孫田

移種や家は入まじ 本風情き

仙有

豊

ひつち種や家はうつて 育てて

東沙

ひつちの豊鶴仲先生と育てて

東沙

ひつち種や新々人と育てて

林靈

ひつちの豊田の三郎の家入に 上サ素總
移田や、あめふるのよすく家入、雨相
あうちゆりはく、日輕家のり、トサ文朝

ひつち種栽培しつづけたりへ、ヒタチ達也

落水

俱利伽羅や、落葉樹木のあ

蜀

帆がううふさみ工事の如く、古

舊古

櫻

雨乞の小町り果ておこり、水、菫村

舊古

志でやうと車小町り果てお、菫鷦

舊古

櫻

旅人の付手行乞金おどり、お

京橋通

是黒豆の田中おどり、お

房山

ゆきおほれの丁度一おどり、水

ムツ杜山

風向工管引歩引や筋一あ

古菫村

新米

新 来 水 小 菓 は ま く り 一 茶

新 来 や あ ま し 城 方 小 ま く り 一 茶

新 来 や あ ま し 城 方 小 ま く り 一 茶

新 来 や あ ま し 城 方 小 ま く り 一 茶

新 来 や あ ま し 城 方 小 ま く り 一 茶

新 蒜 麦

新 蒜 麦 の 事 例 有 て 上 重 う ね 一 茶 知 风

新 蒜 麦 七 肉 情 の 隅 以 不 重 一 茶 知 风

新 蒜 麦 七 肉 情 の 隅 以 不 重 一 茶 知 风

新 蒜 麦 七 肉 情 の 隅 以 不 重 一 茶 知 风

新 酒

古 伝 一 茶 一 茶

新 酒 一 茶 一 茶

新 酒 一 茶 一 茶

新 酒 一 茶 一 茶

古 伝 室

古 伝 室

古 伝 室

古 伝 室

新 酒 一 茶 一 茶

新 酒 一 茶 一 茶

新 酒 一 茶 一 茶

新 酒 一 茶 一 茶

濁 酒

濁 酒 一 茶 一 茶

濁 酒 一 茶 一 茶

濁 酒 一 茶 一 茶

濁 酒 一 茶 一 茶

新 葵

新 葵 一 茶 一 茶

新 葵 一 茶 一 茶

新 葵 一 茶 一 茶

新 葵 一 茶 一 茶

紅葉 鮒

紅葉 鮒 一 茶 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

名 雪 一 茶

手の内を知りては、お葉射トサガタ。

唐元和之流，本非全名也。前人有
左郎然

川上生牛門の事和江寧府

卷之三

尾越鴨

年譜を掌撲の本より引いて書
うりは上孝と漢私事とがまくの高へ延て友秋の
ひ角とく筆飛ばすとさりと云ふ事なりとゆ
先せど

鴨も何の苦難をかうとも
吉田のあらゆる處をのぞくの
略と云

二、八

卷之三

之種上氣之病者如寒之屬此體

綱代打

延山城下近水泳魚網代名一隻重泳魚九角
十二月三十日午後是日黃之南之濱網代名

調代本工打出來也

詩
序

宋之文忠公集卷之十一

下
ナ
精
中

露霜

寄寓より
在り海
北

卷之三

香齋文集の序

徐承
汝
水

露時雨

立昇る事無く寒の事無く

卷之二

この夜は第一の神のやうへさせ多^コ費

ゆくものあき、暮れをや寄へさせ イセ 也 終

暮雨雨

葉高、庭つゝ木あつ、病志く縫。

イセ

物事にすら身のなまけたせば寄ふき

萬子子

叶の葉ひ木のまほあすまへくき
萬の安

露寒

持て灯の燈をよせりの夜寒く代

一葉

露葉を葉はあら葉の葉の葉の葉

仙内

持て灯の燈をよせりの夜寒く代

一葉

葉の葉を葉はあら葉の葉の葉の葉の葉

仙内

持て灯の燈をよせりの夜寒く代

一葉

葉の葉を葉はあら葉の葉の葉の葉の葉

仙内

持て灯の燈をよせりの夜寒く代

一葉

葉の葉を葉はあら葉の葉の葉の葉の葉

仙内

持て灯の燈をよせりの夜寒く代

一葉

肌寒

み叶ハナリと身のうり枯れ一木

薄了

身のうりと身のうりと身のうりと身のうり

トサ 以尼

身のうりと身のうりと身のうりと身のうり

トサ 以尼

夜寒

乳麺り下葉がるる夜ももれ

菊

と身のうりと身のうりと身のうりと身のうり

トサ 丈子

ちううと物うきて宿す夜定ハ 一
手の御まきをもつまもつれ、

本の字よなよおせあくね定ハ

中雲

炉ゆよ茶種マツシキ夜定ハ

京春雨

宋橋の月見ムツミ木定ハ

魚代母

無あらぬや夜定ハ 猫ネコ定ハ

トサトホ

叶ハタケの夜見ハタケ夜定ハ

金龜カニカマ古

かくの候木様カクノヒ夜定ハ

圓更

鶴葉の幕ツバキ夜定ハ 河東カワヒ

有化

うきよや道定マツシキ夜定ハ 教老カウラ

ミカヘ達定

翁主や老屋の門桂叶カツヤの幕カマクラ

冬雪

あま主や山桂叶カツヤの幕カマクラ

春

翁主や山桂叶カツヤの幕カマクラ

朝霞

朝霞や山桂叶カツヤの幕カマクラ

テハ

静移

分古

中儀

翁主や山桂叶カツヤの幕カマ克拉

朝霞や山桂叶カツヤの幕カマ克拉

朝霞

さくら寒

月の入一山あえ川ハモニ海、宇

山音

薄寒

うす寒や美一うすす耐の轉

山音

冷

うす寒や美一ほし日等

山音

霜踏麻

霜のうちハ寒一や寒一麻りの

山音

新綿

新一と寒ふ毛蒸の音

山音

番綿

萬千萬三萬何うに候

萬の連連を以接益を

山音

室せきあゆまさら
猿皮を年ふ

當船のとよあきうて競ひり

山音

秋深

秋のきは深ハ何をもる

山音

冬延

冬延きけきよむる物除し因

古寒松

事すの草木是の鹿を近ミ、鹿を

毛生すの草木は近ミ

山音

暮秋

ねうゑて海のものや暮の秋

古寒松

行秋

うふく袖子の葉をすすめの秋トサ十
行秋の四立自よきすすきこれ 古木子
行秋を鼓うのまむらうとせ、一
ゆく秋やほゑ柳も萬葉あきを
ゆく秋の桂子日を萬葉と斜角が
行秋やさきひなせと壁の月居
り秋や鶯うたと風相のうへ
良のめおすり秋の風うるま
り秋やそぞれ新まよ小き争ミツ民
嘉カニ文

秋惜ム

秋アキ後

博多より秋アキの日和の草 墓田
君たちよりの席シマツの秋を惜アラガシム

露水

九月盡

九月廿日の月を惜アラガシム

九月や大方をせきて九月臺カニ 宮
御弓の弦引タナヒキを九月臺カニ 嘉カニ臺
羅ラの唐カニ味カニのあや、九月臺カニ、是シテ青
画カニをきよひとせき、九月臺カニ、是シテ青

長夜

長き夜ナガシの旅リョクをよみゆきをり

古文

暮外

寫する津色を夜の長され カ丹経

長き衣や旅の本船をもひゆく

麻丘

事の人の泊りよあひし夜とよ

麻村

住吉の神送晴りあり法神當て候れども住吉の神を送りあひし夜と法神はせうど九月三十日晴り

一月三日

此民盡

秋葉秋葉の日や往き法神ノヨリ

金步月

秋聲

かのよき音かのよき音秋の音

甘草

秋葉秋葉の日や往き法神ノヨリ

古 楠便

秋葉秋葉の日や往き法神ノヨリ

古 楠便

仕古の本

秋草

6290
36 3. 14

